

Title	近代におけるノデス力疑問文の普及
Sub Title	
Author	林, 淳子(Hayashi, Junko)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2024
Jtitle	日本語と日本語教育 No.52 (2024. 3) ,p.19- 34
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20240300-0019">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20240300-0019</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 近代におけるノデスカ疑問文の普及

林 淳子

## 1. 疑問文における普通体と丁寧体の非対称性

現代共通語の疑問文には多様な文型があり、疑問文の種類、話し手の属性、使用場面などの条件によって使用可能な文型、選好される文型が異なる（林（2020））。たとえば、(1) のように文末が「カ」あるいは「ノカ」で終わる疑問詞疑問文は対話場面で質問の文として使用できないことがしばしば指摘されている（野田（1995）など）。

(1) 今日の会合に誰が来る {か／のか} ？

しかし、同じ文型の疑問文であっても (2) のように間接疑問文であれば使用可能であり、(3) (4) のように文末に「ネ」「ナ」といった助詞がつけば対話場面で質問の文として使用することができる<sup>1</sup>。

(2) 今日の会合に誰が来る {か／のか}、教えてください。

(3) 今日の会合に誰が来る {かね／のかね} ？

(4) 今日の会合に誰が来る {かな／のかな} ？

このように「[疑問詞] ～ {カ／ノカ}」という形は対話場面での使用に厳しい制限があるのに対して、この文型に対応する丁寧体の疑問文型「[疑問詞] ～ {マスカ・デスカ／ノデスカ}」は上記のような制限を伴わず、(5) のように対話場面で質問の文として頻繁に用いられる。

(5) 今日の会合に誰が {来ますか／来るんですか} ?

本稿ではこの普通体疑問文と丁寧体疑問文の非対称性のうち、「ノカ」と「ノデスカ」の非対称性を考察の対象とする。ともに「ノ」と「カ」を構成要素に持つ疑問文型でありながら、普通体「ノカ」と丁寧体「ノデスカ」の間に上記のような非対称が生じていることについて、結論を先に述べれば、本稿は、もとは判定要求疑問文（Y/N 疑問文）の文型であった「ノカ」「ノデスカ」のうち、「ノデスカ」のみが不明項特定要求疑問文（Wh 疑問文）にまで使用領域を拡大したことに因るものと考え。そのことを中心に、「ノデスカ」の使用領域拡大の過程について確認することが本稿の目的である。

以下では、「ノカ」「ノデスカ」のように構成要素に準体助詞「ノ」を含む疑問文を総称して「ノ有り疑問文」と呼ぶ。また、Y/N 疑問文によって相手に Yes/No の判定の答えを求める疑問文を「判定要求疑問文」、Wh 疑問文によって相手に不明項目を明確にする答えを求める疑問文を「不明項特定要求疑問文」と呼ぶ。

## 2. 「ノデスカ」文型の成立

### 2.1 近世江戸語の「ノカ」と「ノデスカ」

まず、考察の前提として、ノ有り疑問文の出現期に当たる近世江戸語の「ノカ」と「ノデスカ」の使用実態を確認する。表1は『日本語歴史コーパス江戸時代編Ⅰ洒落本』（江戸）、『同Ⅱ人情本』のコアデータを対象に、ノ有り疑問文を採集した結果である（近世江戸語のノ有り疑問文の全体像については林（2023）で述べた）。

この表が示すように、近世江戸語の口語において、「ノカ」は判定要求疑問文の中心的な文型であり、男性話者が「ノカ」((6))を、女性話者が

表1 近世江戸語のノ有り疑問文

	判定要求疑問文		不明項特定要求疑問文		計
	男性話者	女性話者	男性話者	女性話者	
ノカ	26	6	2	0	34
ノカ+α (へ/エ/ネ/ネへ/ノ)	4/0/0/1/1	19/2/1/0/0	0	1/0/0/0/0	29
ノデスカ	0	1	0	0	1
ノデゴザリマスカへ	0	1	0	0	1
ノダ	0	0	28	2	30
ノダ+α (へ/エ/ナ/ノ/ヨ)	0	0	5/1/0/0/1	12/2/2/1/0	24
ノデアリマスエ	0	0	0	1	1
ノデゴザイマスエ	0	0	0	1	1
ノ	0	0	2	3	5

「ノカ」の後ろに「へ」「エ」「ネ」などの助詞が付く形「ノカ+α」((7))を使用する傾向がある。

(6) 【丹】「そして今じやア何所にあるのだ。つばくら口の懐紙を持って歩行からは。近所にあるか。何所へ稽古にゆく。」

【長】「イ、エ此近所じやアありませんヨ。小梅に居ますは。」

【丹】「小梅から此所へ稽古に来るのか。」

(春色梅児与美 初編巻の三／林 (2023) 例 (23))

(7) 【丹】「よくいろ／＼なことをいふヨ。

そんならどふでも勝手にしろ。」

【米八】「をやおまはんは腹をたたしつたのかへ。」

【丹】「腹をたつてもたゝねへでも。打捨てておけいゝ。」

(春色梅児与美 初編巻之一／林 (2023) 例 (24))

これに対して、「ノデスカ」は同じ範囲で1例しか見られない(8)。また、「ノデスカ」に限らず、丁寧体のノ有り疑問文は数が少なく、「ノデスカ」「ノデゴザリマスカへ」「ノデアリマスエ」「ノデゴザイマスエ」が各1例ずつ、合計4例のみである。そして、これらの丁寧体ノ有り疑問文はいずれも女性話者の発話例である。

- (8) 【こう】「沢山御いじめ被成。小照さんに情合だなんぞと。言はれたもんだから意趣がへしに吾儕を。おいじめ被成ンですか。」  
(おくみ惣次郎春色江戸紫 初編上／林 (2023) 例 (10))

このように、ノ有り疑問文の出現期に当たる近世江戸語において、「ノカ」と「ノデスカ」はまず観察される量の点で大きな違いがあり、「ノカ」が判定要求疑問文の中心的な文型であるのに対して、「ノデスカ」はまだ普通に見られる文型ではなかったのである。

## 2.2 丁寧体ノ有り疑問文の普及

上記のように江戸語では「ノカ」に比して文型としての確立度が低かった「ノデスカ」であるが、近代に入ると、一定数見られるようになる。表2は『日本語歴史コーパス明治大正編Ⅳ近代小説』(コアデータ)の会話部分からノ有り疑問文を抽出した結果を示したものである。

まず、判定要求疑問文の文型を確認すると、この時には既に「ノ」(ノ止め疑問文)が台頭し、「ノカ」や「ノデスカ」より多く見られる(その経緯は林(印刷中)で述べた)。そのうえで「ノカ」と「ノデスカ」を比べると、「ノデスカ」は9例あり、8例見られる「ノカ」に並んでいる。

次に、丁寧体のノ有り疑問文に注目すると、「ノデスカ」全9例のうち6例は(9)のような男性話者の発話例であり、「ノデス」も全8例のうち半分の4例が(10)のような男性話者の発話例であることから、丁寧体のノ

表2 明治大正期小説会話部分のノ有り疑問文

	判定要求疑問文			不明項特定要求疑問文			計
	男性話者	女性話者	不明	男性話者	女性話者	不明	
ノカ	7	0	1	0	0	0	8
ノデスカ	6	3	0	0	0	0	9
ノダ	0	0	0	11	0	0	11
ノデス	0	0	0	4	4	0	8
ノ	1	14	0	3	11	2	31

有り疑問文全体で話者の性別に偏りが見られなくなったことが分かる。

(9) (時雄が、いつまでも帰宅しない芳子について、姉にたずねる)

(時雄) 『それにしても何うしたんだらう。若い身空で、かう遅くまで一人で出て歩くと言ふのは?』

(姉) 『もう歸つて來ますよ』

(時雄) 『こんなことは幾度もあるんですか』

(姉) 『いゝえ、滅多にありはしませんよ。夏の夜だから、まだ宵の口位に思つて歩いて居るんですよ』 (蒲団 1907)

(10) (時雄が芳子の家へ行き、不在の芳子について姉にたずねる)

さて時を移さず、

(時雄) 『芳さん、何處に行つたんです』

(姉) 『今朝、<sup>ちよつと</sup>鳥渡中野の方にお友達と散歩に行つて來ると謂つて出た切りですがね、もう歸つて來るでせう。何か用?』

(蒲団 1907)

長崎(2012)は、江戸後期から明治期にかけての「デス」の普及過程を次のように描く。

- 江戸末期の人情本において「デス」は女性話者の使用例が男性話者の使用例より圧倒的に多い。また、「デス」は丁寧さだけでなく、話し手自身が「身を低める」ような語感を含む。
- 明治期になると、地方から東京に入り込んだ新東京人の使用によって、「デス」は公の場面でも使用できることばになり、品位の低さという属性が薄れていった。

この見方に沿えば、上記のように近代小説の会話部分において「ノデスカ」および「ノデス」の出現量がほかのノ有り疑問文の文型と比べても少なくないこと、そして話者の性別に偏りが見られなくなることは、「デス」の普及に伴う変化であると考えられるであろう。

### 3. 「ノデスカ」の使用領域の拡大

#### 3.1 「ノデスカ」と「ノデス」の使い分け

次に、文型として確立した「ノデスカ」の使用領域の拡大を確認する。前掲の表2を見ると、近代になって一定数見られるようになった丁寧体のノ有り疑問文のうち、「ノデスカ」は判定要求疑問文に用いられ、「ノデス」は不明項特定要求疑問文に用いられていたことが分かる。前掲の例(9)(10)も(9)「こんなことは幾度もあるんですか」は判定要求疑問文、(10)「何處に行つたんです」は不明項特定要求疑問文である。

これは、近世江戸語に見られた普通体ノ有り疑問文「ノカ」「ノダ」の使い分けとの並行性から説明が可能である。すなわち、表1に示したように、近世江戸語の普通体ノ有り疑問文には、判定要求疑問文は「ノカ」系統の文型、不明項特定要求疑問文は「ノダ」系統の文型という使い分けが明確に存在していた(林(2023))。近代に入り、前述の「デス」の普及を背景に丁寧体ノ有り疑問文が増える中で、もともと普通体に存在していた「ノカ」と「ノダ」の使い分けを丁寧体である「ノデスカ」と「ノデス」に敷衍した結果、判定要求疑問文には「ノカ」の丁寧体である「ノデスカ」

	普通体		丁寧体
判定要求疑問文	ノカ	→	ノデスカ
不明項特定要求疑問文	ノダ	→	ノデス

図1 疑問文の種類とノ有り疑問文の文型の対応

が用いられ、不明項特定要求疑問文には「ノダ」の丁寧体である「ノデス」が用いられるようになったものと考えられる（図1）。

### 3.2 「ノデスカ」の不明項特定要求疑問文への進出

ところが、現代語では「ノデスカ」は(11)(12)のように判定要求疑問文にも不明項特定要求疑問文にも用いられ、丁寧体ノ有り疑問文に図1のような「ノデスカ」と「ノデス」の使い分けは見られない。

(11) 今日の会合に佐藤さんは来るんですか？

(12) 今日の会合に誰が来るんですか？

たとえば、『日常会話コーパス』（雑談・コアデータ）から集めたノ有り疑問文についてまとめた表3を見ると、「ノデスカ」は判定要求疑問文の例の方が多く、2割（22/110例）は不明項特定要求疑問文の例である。

表3 現代語のノ有り疑問文

	判定要求疑問文		不明項特定要求疑問文		計
	男性話者	女性話者	男性話者	女性話者	
ノカ	6	4	0	0	10
ノデスカ	52	36	15	7	110
ノダ	0	0	9	5	14
ノ	194	263	83	109	649

一方で、この調査範囲には「ノデス」が不明項特定要求疑問文の文型として用いられる例は見られない（したがって、表3に「ノデス」の欄はない）。もちろん「[疑問詞]～ノデス」の形をとる疑問文は実際には存在するが、調査範囲に見られないことから分かるように、丁寧体のノ有り疑問文は、明治大正期以降現在に至るまでの間に疑問文の種類によって「ノデスカ」と「ノデス」を使い分ける状態から、疑問文の種類にかかわらず「ノデスカ」優勢の状態へと変化してきたことが推察される。

この変化は、もともと判定要求疑問文の文型であった「ノデスカ」が不明項特定要求疑問文にも用いられるようになったことを意味するが、この変化が起こったのもやはり近代であると思われる。というのも、表2で示した近代小説の会話部分の調査では「ノデスカ」と「ノデス」は完璧に使い分けられているように見えるが、同時期の資料からより多くの例を集めると、「ノデスカ」の不明項特定要求疑問文への進出が既に始まっていることが分かるのである。

表4は『日本語歴史コーパス明治大正編Ⅰ雑誌』（本文種別：会話、文体：口語、非コアデータも含む）から「ノデスカ」を抽出し、資料の成立年別に判定要求疑問文と不明項特定要求疑問文の割合を示したうえで、不明項特定要求疑問文の疑問詞別の例数を表したものである。表3に示した現代語の2割よりは割合が低いものの、明治大正期には既に「ノデスカ」が不明項特定要求疑問文に用いられていたことが分かる（ただし、例数の少ない1894・1895年の割合については除いて考える）。

また、疑問詞別の例数を見ても、「なぜ／どうして」と「どう」の例が比較的多いものの、「何」「誰」「いつ」「どこ」などほかの疑問詞の例も幅広く確認でき、特定の疑問詞への偏りはないと言えそうである。

そのほか、ノ有り疑問文一般に見られる特徴も既に持っている。金水(2012)は現代語の疑問詞疑問文における「一体」とノ有り疑問文のむすびつきの強さを検証しているが、この時期の「[疑問詞]～ノデスカ」に

表4 明治大正期雑誌の「ノデスカ」

資料の成立年	1894 1895	1901	1909	1917	1925
計	7(100)	23(100)	85(100)	25(100)	127(100)
判定要求疑問文	5(71.4)	19(82.6)	70(82.4)	23(92.0)	108(85.0)
不明項特定要求疑問文	2(28.6)	4(17.4)	15(17.6)	2(8.0)	19(15.0)
なぜ/どうして △=何の理解で ▲=何をしに	0/0	1/1	4/1/1 △	0/0	4/4/1 ▲
何	0	0	2	0	0
誰	0	1	0	0	0
いつ/何時/何日	0/0/0	0/0/0	1/0/0	0/0/0	0/1/1
どこ	1	0	0	1	1
どう	0	1	5	1	2
どんな/どういう	0/1	0/0	0/1	0/0	3/0
いくつ	0	0	0	0	1
どのくらい	0	0	0	0	1

も「一体」と共起するものが見られる。

- (13) 『ははア、いや實は私も兄様の事で面白からん噂を聞きましたが、  
兄様は一体何うして醫者を止めて了つたのですか』

『それでございます。其事からお話を致さうと存じますが、まア何  
處から申したら』 (「左巻」川上眉山(作) 太陽〈1901-12〉)

- (14) 『何うして、貴郎は僕にかう親切にしてくださるんですか?』

さう團は訊いて、

『貴女は僕を殺人犯一貴人がたの敵の一人と信じておいでぢやあり  
ませんか。それでゐて、かういふ風に僕を助けようとしてくだ  
さる。一體此りやア何うしたといふんですか』

狭い戸口の薄暗いなかで、團は女の眼の和かな輝きに近々と面して立つてゐた。

〔「悪の華」馬場孤蝶（作） 婦人倶楽部〈1925-3〉〕

このように近代に入って「ノデスカ」が不明項特定要求疑問文に進出してきたことは確かである。ただし、本来この領域を担うはずであった「ノデス」を凌駕するほどではまだない。表5は表4と同じ範囲で疑問詞「何故」を持つ疑問文を集め<sup>2</sup>、文末形式と資料の成立年とによって整理したものである<sup>3</sup>。いずれの年においても、「ノデスカ」より「ノデス」の方が多く、丁寧体のノ有り疑問文の中では、まだ「ノデス」の方が優勢であることが窺える<sup>4</sup>。

表5 明治大正期雑誌の「何故」の文末形式

資料の成立年	1888	1984 1985	1901	1909	1917	1925	計
ノデスカ	0	0	1	4	0	4	9
ノデス	0	0	3	6	1	10	20
ノデショウ (+ $\alpha$ )	0	2	1	3	1	7	14
ノダ (+ $\alpha$ )	0	3	14	12	13	21	63
ノダロウ (+ $\alpha$ )	0	6	2	2	2	10	22
ノカ (+ $\alpha$ )	0	0	0	6	3	9	18
ノ	0	7	3	13	3	13	39
ノ有りその他	0	0	1	2	0	1	4
ノ無し疑問文	2	40	22	44	14	41	163
合計	2	58	47	92	37	116	352

### 3.3 「ノデスカ」の特徴

このように明治大正期にはまだ「ノデス」の方が優勢であったわけだが、その後現在に至るまでに「ノデスカ」の方が優勢になっていくという変化があったと想定される。多様な疑問文型の中でどの文型が中心的な位置を占めるかということは、疑問文型の体系の中でさまざまな要因が絡み合った結果であるため、「ノデス」と「ノデスカ」だけを比較することは適切でないものの、ここでは「ノデス」優勢から「ノデスカ」優勢への変化の要因を考察するために、「ノデス」と比べた場合の「ノデスカ」の特徴について考えてみたい。

尾上（1983）は、不定語を含み、「カ」を文末に置く疑問表現の文型〔x（不定語）…カ〕および〔x…ノカ〕について「「自らは空欄を埋めたいと願っている」という姿勢を助詞「カ」をもってうち出し、そのことによって空欄の充填を相手に期待することになるもの」（p.412）であると説明している。これに対して、文末に「カ」を置かない文型〔x…（終止形）〕および〔x…ノダ〕は「不定項を含む事態をあるいは述定的にあるいは「ノ」と準体言化して述べ上げて相手の前に投げ出し、そうすることによって相手が不定項を特定、明確化してくれることを期待する表現である。」（p.411）と述べている。つまり、「ノデスカ」が「ノデス」と異なる点は、話し手の不明項特定を望む姿勢が明確に示された文型であることである。

これについて、確かに上記表5の範囲で見られた明治大正期の「何故～ノデスカ」には、(15) (16) のように相手への追及の姿勢を明確に打ち出した場面での使用例が多い。

(15) 『あの時陪審官の中に誰か識つた顔がありましたか？』

『いいえ。實を申すと私は大變な近眼なのでして、顔なんかちつとも見えはしなかつたのです。』

『でもあの時眼鏡は胸のところに吊げてみましたね。何故あれをか

けてよく見なかつたのですか?』

かう余が訊ねると、意外にもレエトン君は急に笑ひ出した。極めて静かな笑ひではあつたけれども、變なところで思ひがけない笑ひに接したので、余は極めて奇異の感に打たれたのである。

『ハハハハ、あなた方法家といふものは非常に鋭いですね。どんなことでも逃さずにちやんと見て居られる。(後略)

(「ハートの九『第五回』」ビ・エル・ファルジャン (作) /延原謙 (訳) 太陽〈1925-11〉)

- (16) 『神鞭さんは去年販賣課の人を撲つたことがありましたね。』

と私は大きな聲で訊いてやつた。皆は無論好奇心を動かして耳を聳てたやうだつた。

『撲つた。』と神鞭さんは頻りにペンを走してゐた。英文と來ると社中隨一で、そのまま新聞に出せるくらゐに書く。

『あれは何故撲つたんですか?』

『宜いぢやないか。あんなことはもう意に介してゐない。』

『撲つて置いて意に介さないは些つと蟲が好過ぎはしませんか?』

と私はこの先生の無頓着には時折腹の皮を擦る。

(「主権妻権」佐々木邦 (作) 婦人倶楽部〈1925-12〉)

これに対して、「何故～ノデス」は「何故～ノデスカ」と同様に追及の場面で用いられる (17) のような例もあれば、単に知識の伝達を求めて問う (18) のような例もある。

- (17) 山内は、更らに押し被せるやうに言つた。

『こんな人に保護されるくらゐなら、なぜ、僕の家から保護を受けないのです? なぜ急に、行方なんか晦してしまつたんです?』

鐵馬は、さもさも心外だといふやうに、詰つた。

『だつて、それにはそれで、いろんな事情があつたんですもの。』

(「女人群像」中村武羅夫(作) 婦人倶楽部 <1925-3>)

(18) 此人佛語は自ら繰つる事餘り上手ではないながら、之を解するには充分差支なき力ある爲め、佛の近衛兵の行軍袋を眺めて居たが、やがて一個の佛士官に向て、

ねへ君、何故此袋には此種の鳥標が附て居るのです』と問ふた、

其は近衛兵の持つ袋だからです、我佛蘭西帝國の近衛兵は普通の兵士と異なる記標として、一般鷲記標を附て置のです』と佛士官は答へた、

(「セバストウポルの火花(承前)」トルストイ(作) 嗟峨の屋おむろ(訳) 太陽 <1901-9>)

もちろん現在の「ノデスカ」は追及の場面に限らず広く用いられるが、「ノデスカ」における答えを求める話し手の姿勢の明確さが近代以降の話し言葉のスタイルに合っていたことが、「ノデスカ」が「ノデス」を凌駕した要因の一つである可能性を、上記の事実は示唆するであろう。

#### 4. まとめ

ここまで述べてきたことをまとめると、次のようになる。

- 近世江戸語において「ノデスカ」を含む丁寧体ノ有り疑問文は数が少なく、かつ話者は女性に偏っていた。
- 近代に入ると、「デス」の普及に伴って「ノデスカ」を含む丁寧体ノ有り疑問文の数が増えるとともに、男性話者の発話例も見られるようになり、話者の偏りは解消された。
- もともと判定要求疑問文の文型であった「ノデスカ」は近代に入ると、不明項特定要求疑問文にも用いられるようになり、もともと不明項特定要求疑問文を担っていた「ノデス」との併存状態に入った。

### 5. 「ノデスカ」と「ノ」—ノ有り疑問文の中心的な文型の交替—

現代語のノ有り疑問文についてまとめた表3から分かるとおり、現代語のノ有り疑問文の中心的な文型は「ノデスカ」と「ノ」である。両者は、ノ有り疑問文の出現期に当たる近世にはほとんど見られない文型であったのに、近代に入ると数を増やし、また使用領域も拡大して、現代語では話者の性別の点でも疑問文の種類の数でも偏りなく使える文型になったという点で共通している。

このうち、「ノデスカ」は本稿で説明してきたとおり、判定要求疑問文を担う文型「ノカ」の丁寧体として成立した文型が、不明項特定要求疑問文へと使用領域を広げたものである。一方、「ノ」は、不明項特定要求疑問文の文型である「ノダ」から「ダ」を落として成立した文型であり、初めは「ノダ」と同じく不明項特定要求疑問文にのみ用いられていたものが判定要求疑問文へ使用領域を広げたと見られることを林（印刷中）で述べた。

そして、このように「ノカ」「ノダ」から展開した「ノデスカ」「ノ」がノ有り疑問文の中心的な文型になっていく一方で、近世江戸語で中心的な文型であった「ノカ」「ノダ」は疑問文の種類がそれぞれ判定要求疑問文／不明項特定要求疑問文に限定されたまま現在に至る。したがって、本稿冒頭で取り上げた「ノカ」と「ノデスカ」の非対称性というのは、結局、先発の「ノカ」が近世江戸語における「ノカ」と「ノダ」の使い分けのままに判定要求疑問文にとどまったのに対して、後発の「ノデスカ」が不明項特定要求疑問文に進出していった結果であると言えるのである。

さらに、現在では、「ノカ」「ノダ」は、後ろに何も助詞をつけない場合、男性話者の粗雑な話し方、高圧的な話し方をイメージさせる文型となっている。たとえば、(19)において、「ノカ」「ノダ」は一家の父親（貫太郎）がだんだん機嫌を悪くしながら発話する文であり、母親（里子）はけっして「ノカ」「ノダ」を用いない。

(19) (夕食時に不在の娘について)

- 里子「あら、シーちゃん」  
 貫太郎「静江、どしたんだ」  
 里子「どしたの」(キョロキョロする)  
 貫太郎「具合でも悪いのか」  
 ミヨ子「いいえ」  
 きん「ちょっと、ねえ」  
 里子「どしたの、出掛けたの?」  
 ミヨ子「ええ」  
 貫太郎「どこ、行ったんだ!」 (『寺内貫太郎一家』)

このように「ノデスカ」の普及は、近世から近代にかけてノ有り疑問文の中心的な文型が交替したという現象の一面に位置づけられるものである。

#### 注

- ただし、(4)「誰が来る |かな／のかな| ?」は相手にまともになずねる解答要求疑問文の文型ではなく、不確定感覚を抱えていることを見せて結果的に相手から答えを引き出す解答誘発疑問文の文型である点で「誰が |来ますか／来るんですか| ?」や「誰が来る |かね／のかね| ?」と異なる(林(2020))。
- 疑問詞として「何故」を選んだのは、「なぜ」「どうして」などの疑問詞を持ち、理由をたずねる疑問文ではノ有り疑問文が求められる傾向のあることが、これまで多くの研究で指摘されており(久野(1983)、田野村(1990)、野田(1995))、より多くのノ有り疑問文を集めることができると考えたためである。なお、理由をたずねる疑問文でノ有り疑問文が求められる事情については林(2015)で述べたことがある。
- ただし、「何故」を含む疑問文でも、「何故?」のように疑問詞一語で構成される文や、「～のは何故です?」のように「何故」が述語になる文は除く。また、文末形式「ノダ」には「ノジャ」を含み、「ノダロウ」には「ノデアロウ」を含む。各文末形式の(+ $\alpha$ )の内訳は下記の通りである。  
 ノデショウ：ノデショウナ、ノデショウネ、ノデゴザイマショウ  
 ノダ：ノダイ、ノダエ、ノダネ、ノダヨ  
 ノダロウ：ノダロウカ、ノダロウナ、ノダロウネ  
 ノカ：ノカナ、ノカネ  
 また、「ノ有りその他」は「ノカシラ」「ノサ」「ノデイ」「ノデアルカ」を指す。
- 本稿の議論には直接関係しないが、表5から、「何故」の文末形式としてノ有り疑問文とノ無し疑問文の割合の推移を観察すると、年を追うごとにノ有り疑問文の割合が増えることが

分かる。

### 参考文献

- 尾上圭介（1983）「不定語の語性と用法」渡辺実編『副用語の研究』明治書院
- 金水敏（2012）「日本語の疑問詞疑問文と『の』の有無」『語文』99（大阪大学国語国文学会）
- 久野暲（1983）『新日本文法研究』大修館書店
- 莊司育子（1992）「疑問文の成立に関する一考察—デスという形式をめぐる—」『日本語・日本文化研究』2（大阪外国語大学日本語学科）
- 田野村忠温（1990）『現代日本語の文法Ⅰ—「のだ」の意味と用法』和泉書院
- 長崎靖子（2012）『断定表現の通時的研究—江戸語から東京語へ—』武蔵野書院
- 野田春美（1995）「～ノカ？、～ノ？、～カ？、～φ？—質問文の文末の形—」『日本語類義表現の文法（上）』くろしお出版
- 林淳子（2015）「Wh 疑問文において『ノ』の有無が問題になるとき」『日本語学論集』11（東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室）
- 林淳子（2020）『現代日本語疑問文の研究』くろしお出版
- 林淳子（2023）「江戸語のノ有り疑問文—多様な形式の使用実態—」『日本語と日本語教育』51（慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター）
- 林淳子（印刷中）「近代におけるノ止め疑問文の台頭」『近代語研究』24（近代語学会）

### 使用コーパス

- 国立国語研究所（2019）『日本語歴史コーパス江戸時代編Ⅰ洒落本』<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/edo.html#share>（2022年8月7日確認）
- 国立国語研究所（2019）『日本語歴史コーパス江戸時代編Ⅱ人情本』<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/edo.html#ninjo>（2022年8月7日確認）
- 国立国語研究所（2019）『日本語歴史コーパス明治・大正編Ⅰ近代雑誌』[https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/meiji\\_taisho.html#zasshi](https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/meiji_taisho.html#zasshi)（2023年12月30日確認）
- 国立国語研究所（2021）『日本語歴史コーパス明治・大正編Ⅳ近代小説』[https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/meiji\\_taisho.html#shosetsu](https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/meiji_taisho.html#shosetsu)（2022年8月7日確認）
- 国立国語研究所（2022）『日本語日常会話コーパス』（2023年8月16日確認）

### 用例出典

『向田邦子シナリオ集Ⅴ寺内貫太郎一家』（岩波書店）

### 付記

本稿の内容は、日本語文法学会第24回大会パネルセッション（大会委員会企画）「ノダ文研究の現在地—ノダの時空間変異から見た研究の展開—」における発表内容の一部に基づきます。席上、ご質問、ご意見をくださった方に感謝申し上げます。また、本稿の内容は科研費22K00598「ノダと方言におけるノダ相当形式の対照研究」（研究代表者：野田春美）の成果の一部を含みます。